

【思わくの錯綜】 第28回

中学校学習指導要領の確定版(告示)に、改訂案と比べて、「銃剣道」が明記されたことが問題になっている(もう一つは「オルガン」)。法的には、改訂案へのパブリックコメントを受けて、文科大臣が行ったのだが、実際は誰が学習指導要領の文章を作ったのか。

中教審(中央教育審議会)は、昨年12月に答申を出して新学習指導要領への関与は終わっている。おそらく、そろそろ出る学習指導要領の『解説』の、作成協力者の教授、教育委員会指導主事、校長・教頭・教諭、文科省からの編集者の課長・視学官・学校教育官・教科調査官だろう(『解説』最後の名簿)。

イデオロギーは、一つのものとして、「自動的」に「内面化」されるものではない(①13頁)。「ルール」に基づきながらも(410頁)、そこには、「出世」や「保身」、競争などいろいろな「私的欲望」(「主体的契機」「自発性」≡「思わく」)がある(398頁)。その「見返り」が保証されなくなった時、イデオロギ



ーが内面化されていたとする「合理化」がはかられた(401頁)。そして、「イデオロギーの教え込みの内容」ではなく、形式が『隠れた機能』として既存秩序の不断の再確認と実質的な服従の調達とを可能」にする(383頁)。安富は「立場主義」と説明している。

学習指導要領を作った人たち(前川喜平氏を含む)は、どういう経歴でどういった教育理論や実践にかかわってきたのか、どういう思わくがあつたのか。どういう団体とかかわり、どういう立場だったのか。その思わくは、^{コンピテンシー}資質能力という形式に対して「内容」の恣意的変更を可能にしつつ、全体や他教科との文章形式の画一化(「く」についてくを通してくを身に付ける)を通して、どうなつていったのか、課題である。(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ① 広田照幸『陸軍将校の教育社会史 立身出世と天皇制』世織書房、1997年。引用部分の一ノ瀬俊也氏(①)の第20回による引用を参考に生活綴方の源泉(第26回)を考えた。
- ② 安富歩『満洲暴走 隠された構造 大豆・満鉄・総力戦』(角川新書) KADOKAWA、2015年、190頁。